

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3.月光値千金

3-1

米国のリーマン・ブラザーズが経営破綻して世界恐慌の引き金となった前日の、2008年9月14日。真紀は東京駅から長野新幹線に乗り終着駅の長野駅でJR篠ノ井線に乗り換えると、六駅目の日本三大車窓で知られている姨捨駅に降り立った。

この日は中秋の名月に当たり、駅から間近にある松尾芭蕉ゆかりの長楽寺を中心に『第二十五回信州さらしな・おばすて観月祭』が催されていた。

眼下の斜面に、棚田百選に認定されている刈り取りを待つ棚田があり、その先には千曲川を挟んで善光寺平が広がっていた。

お昼時だったので、乗降客に棚田米のおにぎりとお汁が地元のボランティアから供されていた。真紀はおにぎりを手渡してくれた婦人に礼を言いついでに、『W酒造』への道筋を聞いた。

一年前の丁度今頃、銀座のおでん屋の個室で悪さをしたお詫びだと、照れ隠し気味に堀内からプレゼントされた信州の鎌倉と言われる塩田平に江戸時代から続くK紬工房の上田袖を着ていた真紀は、観光客で賑わう中にいても、ひととき異彩を放っていた。

クラブ『こはる』の近くにある呉服屋〈銀座もとじ〉で新調して、その日が仕立ておろしの黄八丈の訪問着の帯締めを解いただけのまま抱かれた時の帰りしなに、真紀は『お多幸』の店主の顔をまともに見られない程に身体の芯に火照りを抱えていた。

千鳥ヶ淵の桜が満開の頃。年甲斐もなく憂き身をやつした拳句の果てに別れた日本画家のアトリエでの幾度かの房事。天然岩絵の具の接着剤となるニカワの得も言われぬ匂いを含んだ明け方の後朝（きぬぎぬ）。

春秋に分銅をのせると、真紀は秋の重さに動かしがたい運命を感じていた。

真紀は教えられた通りに踏切を渡ると、実が色付きはじめたリンゴ畑に目を見張りながら、坂道を下って行った。

堀内が膵臓癌で、呆気なく男盛りに幕を閉じてから半年になる。男の生まれ育った所が無性に見たくなって、意を決したものの、やはり張りつめていたのか、真紀は秋の日差しの心地好さやで気持ちが緩むと、装いに不釣り合いな伸びをした。電車で来た事に、心から自足していた。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-2

行き交う観光客の物騒がしい中を、どこか後ろめたい気持ちを感じた真紀は、思わず独り笑みをもらした。

道が左に折れた先の秋空に立つ、一本の高い煙突を目に留めた真紀は、いきなり既視感を覚えて、素材の煉瓦造りや、その下にある酒造工場の用途に応じた棟の配置などを思い浮かべる事ができた。

さっと涼風が吹き上げて、脇の下にうっすらと掻いていた汗と戯れる。(あなた?)と問い返した女は、しばらく立ち尽くしていたが、やおら身じまいを正すと歩き出した。

W酒造の来客用駐車場は、観月祭も重なったせいで込み合っていた。

真紀は臨時駐車場に停められた大型バスから降車した乗客が、わいわい言いながら歩いてくるのを見やりながら、土堀伝いに正面入口へと向かった。

買い物客で混雑している直売所の店先で、たまたま秋の蔵開きの工場見学のアナウンスを耳にした真紀は、今度の旅の眼目のひとつである女杜氏と邂逅する好機が、まぐれ幸いに到来したことを予覚した。

真紀は十数人の一団と共に、土蔵の中へ案内された。バレットにうず高く積み上げられた米袋の山の前で、フードキャップを被り白衣の上下を着けて長靴を履いた女性が、ハンズフリーのスピーカーマイクを使い、自らを杜氏と名乗ってから、歓迎の言葉と社歴について話し終わると、

「こちらにある酒米は、美山錦と言う品種です。三十年ほど前から長野県の地域性に合う酒米として定着しました。現在、当酒蔵では無農薬の契約栽培を始めつつあります。それでは、これから工程を順次ご覧いただきますので、足下に気を付けてお進みください」

言い添えた女杜氏の日鼻立ちを昌幸とダブらせていた真紀は、自然に満ち足りた気分になっていた。

図らずも酒蔵見学を終えて、試飲の酒の残り香を口内に感じながら外気に触れ、心地よい疲労感に包まれていた真紀は、工場の敷地に立つ巨木の紅葉に同化しつつも、その紅色を際立たせている車体を、何気なく認めた。

「あれが～」とつぶやいた真紀は、重なる偶発を気味悪がるでもなく、さもありなんと思ひ、「あなたの悪戯～」と愛おしむように、含み声で秋空へ言い捨てた。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-3

久里浜までドライブした時に、オーディオT Tクーペに初めて同乗した堀内が、妻のベンツ E 3 2 0 の赤との違いを他意はなく言い立てたので、女心からか、馴染みのディーラーに調べてもらったところ、当方はブリリアントレッドで先方はシグナルレッドだと分かって妙に安堵した往時を、真紀は今、眼前の光景とダブらせて連想していた。

「真紀さん」

背後から不意に呼び止められた。

「はい」

真紀は咄嗟に受け答えて振り向いた。

「兄がお世話になりました」

柔らかな物腰で挨拶する、ショート・ヘアの女杜氏の姿があった。

「はあ」と真紀はギコチナイ相槌を打った。

「ガイド振りはいかがでしたか？」と女杜氏は親しみを込めて尋ねた。

「えーと……、ごめんなさい」と真紀は言い淀みつつ、面映ゆさを取りつくろうように襟元を整えた。

「あがってしまいました。何をどうガイドしたのか、覚えていません」

「私も雲の上を歩いているようで……」

「住まいの方へいらしてください」

「……」

「どうぞ、どうぞ」

来館者で賑わう中を、麻里子と並んで歩いて行く内に、真紀は自然と寛いだ感じになっていた。

「似てらっしゃるわ」

「そうでしょうか」

「目がそっくり」

バッグから携帯を取り出した真紀は、堀内のスナップ画像を表示して、「ね！」と、つい調子に乗って、口をすべらせてしまった。

「あなたのことは、風の便りに聞いていただけです」と麻里子は真紀の振る舞いに戸惑いながらも、気持ちを定めてから伝えた。

「えっ？」

「それでも 100 パーセント、ピンとききました」

「私も 100 パーセント」

「ずるいー。私はヒントが 0 です」

麻里子は瞳をこらして訴えた。

「ほら、そんな風も生き写し」

真紀は凝視を仕返し、(笑うと負けよ)をして、ふざけた。

「思っていた通りの方」「麻里子さんも」

笑みと呼吸が二重になった。

赤いボンネットに落ち葉が一枚滑った。そこを右に折れると、数寄屋造りの瀟洒な母屋が見えた。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-4

長廊下を通過して案内された南向きの十畳の居間の左側に北を背にして、繊細な彫りを施した重厚な仏壇があった。

真紀は手ぶらであったけれど、臆することもなく、ごく自然に麻里子に断ってから、仏壇の前に正座をして、ご本尊に一礼後、ローソクに火を灯して線香に火をうつすと合掌した。秋分の日まで一週間足らずで、初彼岸のせいもあってか、真新しい位牌の傍に青紫色のリンドウの花が供えられていた。

不思議と特段の感慨もわいてこないでいる自分自身にも、もっと深いところでつながっているからだと思えば真紀は平静さを保っていた。

麻里子は襖で区切られた二十畳の奥座敷に真紀を通すと、着替えのために席を外した。

縁側を挟んで見える中庭に、築山があり、季節の木立があり、汲みあげられた地下水が注ぐ池には錦鯉が泳いでいた。

あれよあれよと言う間の経緯に違和感を覚え始めた真紀の視点に、映画のカットバックさながら、さっき目にしたボンネットを滑る一枚の落ち葉が、今しも風に乗って舞ってきたかのように水面に触れると、一匹の鯉が鮮やかな緋色を見せて跳ねた。

「お待たせしました」

平服に着替えた麻里子は、外の喧騒など事もなげに言いながら、持ってきたトレイをテーブルに置いた。

「お忙しいのに、よろしいのですか？」

「女杜氏然としてのパフォーマンスは苦手なんです。口実ができてホッとしています」

「麻里子さんとかしているのが、嘘みたいなことに思えてきて……」

「これもご縁ですから。冷酒を持ってきました。いける口ですよ？」

「あら、昌幸さん……？おしゃべりね」

「ええ、酔うと、嬉しそうに問わず語りに真紀さんの話をしてくれました。でも、私と二人きりで飲んだ時だけです。これはヒントになりませんから」

麻里子は、臆する風もなく言って、冷酒を勧めた。

「これ、まとめ買いします」

真紀はグラスの酒を飲みほしてから、旨酒に例えるニュアンスの言い回しをした。

「銀座のお店に送っておきます」

「代金先払いにしてください」

「まだ商品化していませんので」

麻里子は、いわくありげな笑みを浮かべて、やんわりと断った。

「意地悪ね。もうこうなったら、酔わせちゃうから」

この場は砕けるしかないと思った真紀は、相手のグラスにボトルを傾けて応酬した。

「さすが一流の勧め上手。ではニョロニョロと、いただきますようか」

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-5

「え？あ、どこかで聞いたセリフ……」

「血筋は争えませんか」

麻里子は含み笑いをして、空いた二つのグラスに酒を注いだ。

「明るいうちから酒飲む女♪爛より冷が似合います♪」と真紀は不意に歌いだした。

「自生のキノコでジコボウと言います。季節と一緒におろし和えで一献。秋を食べてや」

麻里子も二代目桂枝雀の得意演目『一人酒盛り』をもじって言葉遊びに興じた。

「あなたもキンちゃん！」と江戸女が噺家の符牒を使うと、

「どさ金」と信州女も符牒で返した。

「チョット待って、チョット待って。こう言う戯者は、私がペンペンしますよ」と江戸女が艶っぽく才弾ける。

「兄が企画して、酒蔵で落語や音楽のミニライブを、定期的にやっていました。私が杜氏になってから、もろみ工程や貯蔵工程でクラシックを流しているのが切っ掛けだったようです。酒蔵の音響効果は中々のものですから。そんなことから、私は落語にハマリ、兄はチェロにハマりました」と信州女は急に語調を落として、勢いを修正した。

会話が壺にはまると、トコトンまで興に乗らないと気が済まない男を、潮時をみてセーブしてきた真紀は、「それって、私の役回り……」と思わず不平をもらしていた。

「役回り？」

「あら、ごめんなさい。気を悪くなさらないで。今ね、私が昌幸さんで、麻里子さんが私だったの」

「……」

「いつもブレーキ役だった私が、今日に限ってアクセルを踏み込んでいたから」

「あ、そう言うことですか。了解です。きっと、兄も我慢できなくなって、真紀さんを通して喋っているのかもしれませんがね」と素直に頷いた麻里子は、「ちょっと失礼します」と断って退室した。

いつの間にか部屋の明かりがついていた。

薄暮が染めかけている庭を、ぼんやりと眺めていた真紀は、思いあまる空間移動に気圧されながらも、これは恋した男の贈り物に違いないと得心することにした。

グラスを一つと小袋を手にして戻ってきた麻里子は、何のてらいもなく、「兄の分も注いでやってください」と言ってグラスを差し出した。

改めて乾杯をすると、「これを、お納めください」と麻里子は小袋からチェス駒のストラップを取り出した。

「え？」

「兄が残した品です」

「これを私に？」

真紀は返事に窮しながらも、目の前で楽しげにしている麻里子は、いったい会社の経営実態をどこまで把握しているのだろうかなどと心情をおもんばかりつつ、これも男のメッセージなのかと居心地の悪さを感じていた。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-6

白金の爪で留められた象牙のナイトを手渡された真紀は、
「いただく訳には参りません」と当惑顔で断った。

「全日本学生選手権で優勝した記念に作ったそうです。兄らしいでしょう。真紀さん携帯かしてください」

麻里子は真紀の気持ちもお構いなしに、携帯をバックから出させると、さっさとストラップを取り付けて返してよこし、「形見分け……ぴったんこカン・カン」と神妙ぶったそばから一転して、テレビの人気番組のタイトルを口走るの、兄妹のDNAは争えないものだと解しながらも、相手のなすがままになる気にもなれずに、着信履歴を確認したりしていたが、結局は享受することで折れてしまった。

職業柄と言ってしまうとそれまでだが、誰かと歓談に興じていても、大概是程々の局面で落とし所を探ってしまう習性が真紀には備わっていた。それは昌幸にしても例外ではなかったのに、麻里子とは何か違った。

例えば、先程のこんなやり取りの一端で、

「今日は泊まっていてください」

「いくらなんでも、それは無理よ。そのつもりで来てないし、分かるでしょ」

「ここで会ったが百年目?」

「小心な私に、そうおいでなさいましたか」

「流石に花見とはまいりませんが、月見にご招待いたします」

「酔いもいっぺんで醒めました。こうなったら持ちつ持たれつ、明日帰ることにします」

「よかった! こんなチャンスは百年に一度来るか来ないかですもの」

「私も、これが百年目と思い観念しました」

こんな調子で、互いの素養の抽斗から古典落語の演目『百年目』の一節コードを、すばやくピンポイントで掬い上げると、即興で対話を盛り上げたりする間合いだった。

同性同士の色合いから生まれる妖変かもしれない。

因みに、『百年目』は、二代目桂枝雀の師匠で上方落語の大御所、三代目桂米朝の得意ネタの一つである。

ならば、ビジネスホテルを紹介して欲しいと頼む真紀に、

「ゲスト・ルームへどうぞ?。……。元へ、ごめんなさい、私の部屋です」

麻里子は頑なに演じることが使命でもあるかのように、凜然と見得を切った。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-7

客間の照明が一段と明るさを増していた。

ほろ酔い機嫌が言葉遊びに輪をかけるのは必定で、こうなったからには、もうケセラセラで行くしかないと観念した真紀が、腰を据えて飲み直そうと帯を緩くしたところで、香水の匂いを引き連れた大柄な女が、せかせかと客間へ入って来た。

「義姉です。こちらはお友達の真紀さん。大学の時の先輩です」

麻里子は一見もっともらしい嘘をついた。

「真紀と申します」

真紀はあわてて名のると、腰を浮かしかけた。

「そのままいてください。貞子です。素敵な方ね」

真紀を制した貞子は、ぞんざいな口のききようだが、それでも派手な顔立ちの大きな瞳に枯淡な趣を映していた。

「私の部屋に泊まってもらいます」

「羨ましいわ、そんなお友達がいて……。どちらからいらっしゃったの？」

「東京です。一晩お世話になります」

数分かけて、どうにか気持ちを鼓舞することができた真紀は、貞子を直視して答えた。

「どうぞ、ごゆっくり。私はこれで……。あら、いやだ！編み笠のスペアがあるのか聞きに来たのに、いくら探しても見当たらないの」

「私の使ってください。今夜は見物人～」

「え、それは駄目よ。あなたが踊らないなんて……」

「編み笠、後で持っていきます」

麻里子は真顔で義姉をあしらうと、真紀のグラスに酒を注いだ。

「そう、わかったわ。何か見繕って持ってこさせましょうか」

「みんな取り込み中だから、私がやります」

貞子は麻里子のつっけんどんな言い草に不満顔を見せながらも、「ゆっくりしてってくださいね」と真紀に向って薄笑いを浮かべて言うと、そそくさと居間を出て行った。

「匂うでしょう！」

外気を取り込むためにガラス戸を開けた麻里子は、真紀に同意を求めた。

「正直言って慌てました。まさかこんな形でお会いするなんて！」

「重なる時は重なるものよ。これでオールクリアと思えば、ラッキーでしょう」

「意地悪ね。ところで、踊るとか踊らないとかのお話し……。私のせいなら、困るわ」と真紀は上の空で言いつつ、どこか憎めない人柄を感じさせる貞子の残像を引きずっていた。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-8

麻里子は、十年前有志数名が発起人となって、地域おこしの一環として制作されたオリジナル舞曲『信州さらしな月の里唄』についての経緯から始めて、今夜の踊りを止めたのは、自らの本心によるからで、変に気を回さないでほしいという辺りまでを、この際通常モードの言葉付きに転換させ、過不足なく伝えなければと独り合点して、歴史的背景から説明しだした。

平安時代に編まれた『大和物語』の中に、能〈姨捨〉の題材にもなっている〈我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て〉と詠われる現長野県千曲市の姨捨の月は、江戸の俳人松尾芭蕉も、尾張から木曾路を経て猿ヶ馬場峠を越えた折、小紀行文『更科紀行』で〈倂や姨ひとり泣く月の友〉と詠んでいる……とか、この俳句を刻んである句碑は、今日あなたが降りた日本三大車窓の一つJR篠ノ井線姨捨駅の近くにある古刹〈長楽寺〉に建立されている……とか、また姨捨の月は、京都市嵯峨の大覚寺大沢の池、滋賀県大津市の石山寺の秋月と並んで日本三大名月とも言われたとか、日本棚田百選に認定された姨捨の棚田は、田の一枚一枚に月が映る田毎の月で有名だとかを事細かに話して聞かせた。

それからまた、今年で二十五回目を迎える千曲市観光協会主催の年中行事〈おぼすて観月祭〉が、全国俳句大会と銘打って作品を募り、著名な俳人をゲストに招いての審査や記念講演やら入賞記念句碑除幕式やら棚田米で作るおにぎりの無料配布やらを実施してきた推移の途上で、姨捨の月を取り巻くエリアを中心に、それ以外の名所旧跡を四季の移り変わりに織り込んだオリジナル舞曲『信州さらしな月の里唄』が生まれた流れを、もちろん姨捨駅に真紀が降り立ってから体感した多様な趣も引き合いに出して話し終えた。

麻里子は手酌でグラスに酒を注ぐと、一気に飲み干してから、「貞子さんも発起人の一人です」と言って微笑んだ。

「それでは、なおさら踊らなければ。ねえ、私の事は構わずに……」

今、麻里子が話してくれたあらましを、真紀は昌幸から聞き知っていたけれど、その事はおくびにも出さないで、軽くたしなめた。

「十年頑張ったから、踊り手は大勢いるの。今夜は二人とも見物人。それより、もう、おなかペコペコ?」

麻里子はいとも無頓着に、ゆるワードに戻して放言した。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-9

母屋の北側に下屋が降ろされ、江戸の匂いがする柱廊となっていた。

酒の香が仄かに漂い、虫が鳴いていた。

「あ、まんまる！」と真紀。

「これぞ中秋の名月！」と麻里子。

「東京とは、どこか違う」

「姨捨の月ですもの」

浮かれ調子の二人の女は回廊を少し東へ進み、別棟にある従業員食堂へ渡って行った。

軽口をたたいていた賄い婦と蔵人は、麻里子に紹介されるより先に、真紀の美しい見目形に押し黙った。

「鮎を塩焼きにしてください。後は私がやります」と麻里子は賄い婦に言い置いて、厨房へ入った。

「秋口の雌の鮎は、脂がのって美味しいんですよ」

真紀とおない年くらいの賄い婦は、気後れしながらも、にっこり笑ってお愛想を言う。

「ありがとうございます。いつかテレビ番組で千曲川の友釣りを見たことがあります」

「今頃は投網で獲ったりもするんですよ」

「とあみ？」

「手で持った網を、こうやってパーッと広げて投げる……」

「ああ、わかりました」

二人のやり取りを黙って聞いていた若い蔵人が、照れ臭そうに「じゃ、俺はこれで」と会釈して立ち去った。

真紀が所在無げに小綺麗な調理場を見回していると、W酒造の屋号を染め抜いた法被を羽織った数人の女が軽口を交わしながら入ってきた。みんな真紀の存在に一瞬たじろいだが、真紀の方から自己紹介をすると、てんでに型通りの挨拶をし始めた。

「ご苦労様。思ったより忙しかったわね？」

麻里子が厨房から出できて、女達にねぎらいの言葉をかけた。

「ほんと、今年の観月祭効果は半端じゃなかったです！」

彼女らの中の一人が、飯をよそう手を休めて相槌を打った。

ご飯をよそう者、味噌汁を注ぐ者、おかずを揃える者、お茶を入れる者まで、無駄のない動きで準備し終えた彼女らは（いただきます）とハモってから一斉に食べ始めた。

内心、体育会系さながらのシーンの一部始終を可笑しがっている真紀に、「さあ食べましょう！」と麻里子は声高に言って、賄い婦と運んできた鮎の塩焼き、ウルカ（鮎の腸の塩漬け）、熱燗、白瓜の粕漬けなどをテーブルに並べた。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-10

「これに、もうひと手間かけます。仕上げをごろうじろ」と麻里子は言うが早いか、深めの皿にワタを抜いた鮎の塩焼きを入れて熱燗で浸した。

普段では見せたことがない麻里子のハシヤギ振りに、法被姿の女等は箸の手を休め、呆気にとられていた。

二つのどんぶりに炊きたてのご飯をよそうと、鮎の骨酒を注いだ麻里子は、「酒茶漬けを召し上がれ？」と勧めて、自分から先にサラサラとかわこむと、逡巡している真紀に向って、「美味、珍味、芳醇……さあ、どうぞ！」と自信たっぷりに勧める。

「どうぞ、冷めないうちに？」

賄い婦も自信ありげに進めるので、引っ込みがつかなくなった真紀は、エイヤーとばかりにサラサラとかわこんだ。

座っているだけでも存在感そのものからして妖美漂う女が、端無くも、不行儀をサラッとやってのけるのを目の当たりにした彼女らは、いい女は何をやっても様になることを思い知らされた。

「ひょっとして、女優さんですか？」

彼女らの中の一人が、思わず問い掛けたのを、味覚に気を取られてしまっている真紀に代わって、麻里子が、「残念でした。でも、ありがとう」とその場の空気を、すくい取って答えた。

酒茶漬けを行きつけだった『お多幸』の席で、おくびにも出さなかった男への訝しさもあって、「なぜなのかしら？わからないわ」

と昌幸を知る限りにおいて、とっくにこの食べ物についての能書きを並べていたはずだったから、真紀は男の妹に、疑問符だらけの眼差しで訴えかけた。

「医者嫌いだった兄が、どんな風の吹きまわしか、五十歳の区切りにと一泊ドッグを受けたら、肝硬変と診断されたのです。当然アルコール禁止令でしょう。ところが、お気に入りの酒茶漬けを、今後は一切口にしないかわりに、飲酒は続けてよい事にすると、勝手に独り決めしちゃったんです」

麻里子の返答に、賄い婦も笑って頷いた。

「今夜はどうしても作りたかったの、気に入ってくださったようで、ホッとしています。ひと口含んだだけで、顔をしかめる人も結構いるんですよ」と麻里子が続けるので、

「この感じ……間違いなくあの方らしいわ。なぜ黙っていたのかしら……ね～」

真紀は麻里子を通して、男に問いかけた。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-1 1

惚れ込んだ男と嗜好が同じだったことが、真紀は無性に嬉しくて口吻を洩らした（こうふんをもらした）。

「飲んで帰ってサラサラやるのも、迎え酒がわりにサラサラやるのも悦楽だと口癖のように言っていた兄ですから、真紀さんに隠していたのは、明かしたら最後、自信が持てなかったんですよ」

「きっと、言いたくてむずむずしていたんですね。そう思うと、あの時も……目に浮かんできます」

二人の女は言い合い、泣き笑いをする。

「失礼します！」

知らず知らず女ざかりの二人の語らいに引き込まれていた女達は、漸く人心が付いたように食膳を片づけると、てんでに挨拶をして食堂を出て行った。

「これから、みんな踊りに参加するんです。私たちも着替えましょうか」

「私は見物するだけよ」

「せっかくですから、この地区のオリジナル着物を着てください。兄も喜ぶと思います」

「地区ごとにデザインが違うの？」

「元は同じだったんです。数年ほど前から曲調も振付も地区ごとに変化して、今では競い合っていますけれど、それぞれに見どころ聞きどころがあります。客間に一式用意してありますから、どうぞ」

「酔いがまわってきたのかしら？」

おもむろに立ち上がった真紀は、目頭を押さえてへたり込んだ。

「お疲れになったのでしょうか。お風呂で汗を流してからにしませんか」

「すみません。そうさせていただきます」

張りつめていた心の底を、酒が対流したせいか、微酔で立ちくらみした真紀は、自嘲的に笑った。

真紀は湯化粧をし終わると、用意されていた着物を身につけて、風呂からあがってくる麻里子を待っていた。

「お似合いです！どうしましょう～並んで歩けないわ」

湯上りに頬を桃色に染めた麻里子は、口をあんぐりと開けたまま声高に言った。

表に出ると、地方（じかた）の奏でる舞曲が程近くから風に乗って聞えてくる。

「まだ、姨捨観光会館広場で輪踊りをしているところです」

麻里子はそう言って、月光に照らされた顔を傾げた。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-1 2

「月夜に浮かれる雌狐って、こんな感じなのかしら……あれが姨捨山ですか」
「鏡台山（きょうだいさん）と言います。こちらからは姨捨山に登る月は見られません」
「どうして？」
「古今集に歌われている月は、あの山の向こう側にある麻績村からの景色です」
「おみむら？」
「麻を積む村と書きます」
「素敵な名前ね」
「今度ご案内します」
「いつになりますか。その時はきっとね」

真紀は約束しながら、好いた男の妹と揃いの着物で肩を並べて歩いている様子を俯瞰している分身と喜びを共有していた。

鏡台山に昇る名月を仰ぎ見る観光広場では来賓席用のテントの前で地方の伴奏で踊る立方（たちかた）の輪踊りが披露されていた。

五穀豊穰と月を愛でる馴染みやすい所作の振付けの節々で、型に即興を交える巧者な男踊りと女踊りのフォーメーションが組み入れられ、ひとしお興趣を添えていた。

姨捨駅に降りた観光客達が、緩やかに蛇行する千曲川に沿って広がる善光寺平の夜景を見下ろしながら歩いてくるうちに、じわじわと気持ちを高揚させて、広場にいる大勢の観客に合流してくるので、次第に人波は飽和状態になって行った。

「あの大石が姥石（うばいわ）です。あそこから石段を降りると長楽寺の本堂があって、観音堂や月見堂も観られます」

麻里子は、人でごった返す足もとに気を使いつつ満月が差し昇る方を向いて、真紀の耳朶に触れるようにして言った。

真紀は目前で展開されている山里の月祭りに、たちまち引き込まれていった。

時間の流れが止まった中で、覚えず手を取られた真紀は、否応なしに人混みの前面に引き出されていた。

「ごめんなさい。こうもしないと……」

麻里子は言葉と裏腹に、こうするのが当然とばかりの眼差しを見せて笑った。

「踊ってらっしゃって」と真紀は臨場感と高揚感をない交ぜにして言った。

「今夜は真紀さんの傍にいることにきめているの」

含み笑いで返す麻里子に、「私も、踊りたいわ」と真紀は藪から棒に言った。

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-13

「まあ！」とあっけにとられる女杜氏を尻目に、「本気よ」と江戸女は、まるで当然のことのように言い返した。

「すごーい！」

と女杜氏が嬉しがる様を見て、江戸女は、

「Only ten years have passed?」と言ってしまう。

「え、なんですって？」と女杜氏が聞き耳を立てる。

「たった十年で、これまでにしたのね」

江戸女は月見の宴を風物詩に定着させるのに要した時間の短さに胸を打たれたせいで、こぼれ出た言葉を日本語に言い直した。

そんな中であっても、江戸女は振りを脳裏に焼き付けようと、先程から一人の踊り手を目で追っていた。

「真紀さん、踊りの名取りだったりして？いつだったか兄が、小股の切れあがった女が寄席通いするのは珍しくはないけれど、チェスの有段者は中々いないような話しをしていたことを思えば、そうであってもちっともおかしくないわ」

「ヒントはゼロだったのに、ゼロから生まれる情報もあるのね」と女杜氏を諷してから、

「名取なんて、お金で買えるのよ。こう見えても無駄遣いはしない主義です。ところで、チェスとどこで繋がるのかしら？」

江戸女はひょうげた仕草で問い返した。

「私なりの方程式です」

「うまいことおっしゃるわ！きっと、お兄さんの血筋ね。ねえ、その方程式を使わせて頂くと、麻里子さんもチェスを？」

「不正解……二次方程式でないと解けませんから。さっきの掛け合い話で、鼻屑の噺家は端なくも一致しましたけれど、チェスはまったくの門外漢です。もしそうだったとしたら、真紀さんと合せ鏡に……薄気味悪くないですか？」

「わたしと昌幸さんとは、そうだったのよ」

凜然と言い放つ江戸女に、なぜか女杜氏は嫉妬を禁じえなかった。

真紀は、もう踊りはそっちのけにして、右脳全開で男との追憶に没入していった。

お祭り広場の月下の场景はフェードアウトして、銀座四丁目交差点の時計塔がある和光の建物を俯瞰する夜景にフェードインした。